



阿木燿子の艶もたけなわ

第 107 回

AKI YOKO NO EN MO TAKENAWA

早期発見で治る病気と

いわれるようになったがんだが、依然として死亡率はトップ。だからだろうか、がん患者は精神的に不安定になることも多い。それを解消する新しい試みとして樋野先生が行っている「がん哲学外来」が注目を集めている。阿木さんは好奇心のアンテナを目いっぱい広げて、その診察の中身に迫ります。

YOKO AKI

作詞家として約1500の楽曲を持ち、作家、舞台などのプロデューサー、コーラスグループ主宰と幅広く活躍している。夫はミュージシャンで俳優の宇崎竜童氏。明治大学文学部卒業。横浜市出身。

OKIO HINO

樋野興夫

順天堂大医学部病理・腫瘍学教授

がん患者の本音を引き出した後、五つくらい言葉の処方箋を出すんです。

阿木 「がん哲学外来」って耳慣れない言葉ですが、先生が提唱者でいらっしやる。従来のカウンセリングとは何が違うんですか。
樋野 病状の相談に乗るカウンセリングではなく、ここでは「対話」が主なんです。お茶をお出しして1時間ぐらい話すんです。時には患者さんのご家族や、そうでない一般の方も来られます。
阿木 皆さんと、ただお話をするだけ？

樋野 最初はお互いに何もわからないですからね。冒頭の15分くらいは、どうしてここに来たのかをお聞きするんです。そして、その後はその人が何を悩んでいるかです。その声に耳を傾け、いまの問題点を引き出し、一緒になって考える。対話することで、それぞれの悩みに寄り添っていく感じですね。
阿木 一口にがん患者さんといっても、悩みはそれぞれ多岐にわた

るでしょうね。

樋野 患者さんの悩みの3分の1は治療法なのですが、残りの3分の2は人間関係ですね。しかも、家族間の悩みが多い。

阿木 いざ、がんに罹^{かか}ってみると、それまで潜在化していた親子や夫婦の問題が、白日の下に晒^{さら}されてしまうことがありますね。

樋野 よくあるパターンとしては、旦那さんががんになると奥さんが急に支配的になり、あの民間

療法、このサプリとか言い出して余計なお節介^{せつけい}を焼く。逆に、奥さんががんになると、旦那さんが親身になって話を聞いてくれないなど、冷淡さが目立ってしまう。多くの夫婦はこれで悩んでいますね。なのでリビングや寝室で夫婦が30分間、一緒にいることに耐えられない。

阿木 たった30分が？

樋野 そう、会話がなくても、テレビを見たり、新聞を読んだり、

(注1) 大正・昭和期の政治学者。1914年、東京帝国大学法科大学卒。内務省に入り、21年退職、東京帝国大学法学部助教授に就任。45年12月、総長に就任。著書に『国家と宗教 ヨーロッパ精神史の研究』(岩波文庫)、『文化と国家』(東京大学出版会) など多数。



ひのおきお 1954年、島根県生まれ。順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授、医学博士。米国アインシュタイン医科大学肝臓研究センター、米国フォックスチエースがんセンター、がん研実験病理部部長などを経て現職。2008年、「がん哲学外来」を開設。がん研究会学術賞、高松宮妃癌研究基金学術賞、第1回「新渡戸・南原賞」などを受賞。著書に『明日この世を去るとしても、今日の花に水をあげなさい』（幻冬舎）、『がん哲学外来へようこそ』（新潮新書）、『あなたはそのにいるだけで価値ある存在』（KADOKAWA）など多数。

それぞれ違うことをやっつけてもいいんですが、それでも耐えられない。つまり、顔を見るのも嫌なことですね。

阿木 それって、かなり深刻ですね。

樋野 日本のがん患者が抱える悩みの特徴として、夫婦間の不和が挙げられます。

阿木 まずはそういった方々の話を聞く側に回り……。

樋野 残りは、僕が話しているこ

とが多いですね（笑）。

阿木 ということは、先生がなさっていることは、悩みのお掃除人（笑）。

樋野 いえ、誰も悩みを取り去ることはできません。でも、不思議ですよ。僕に話しただけでは何も問題は解決されてはいらないのに、解消されるんです。

阿木 心のありようが変われば？

樋野 そういうことですね。がんは慢性病とも言えますから、共存

が理想形です。そのためには、気持ちの持ち方が大切なんです。ところで阿木さんは、顔立ちと顔つきの違いってわかりますか。

阿木 顔立ちと顔つきですか？

樋野 顔立ちは生まれながらのものなので、整形でもしないかぎり自分で変えることはできませんよね。でも、顔つきは気の持ちようで変えられます。最初、お見えになったときは、疲れ切って不満げだった。がんの顔つき^①の人が僕

と1時間、対話すると一様に顔つきが違ってくるんです。

阿木 そこで先生は、その人に一番必要な言葉を処方なさる。

樋野 ただ、その言葉は、僕が作ったものではないんです。若いときに出会った本から得たもので。

阿木 素晴らしい本と出会われたご経験が、先生の人生を変えた。

樋野 そうです。「よい師」「よい友」「よい本」に出会うこと。これ

こそが、人生を豊かにする3大法則だと、僕は思っているんです。

まず浪人をしていた19歳のとき、戦後初の東大総長を務めた南原繁の本と出会いました。そこから新渡戸稲造^②に行き着き、内村鑑三^③、矢内原忠雄^④、吉田富三^⑤と広がっていったんです。彼らの言葉を訪れて来た人に処方する。だからがん哲学外来は、それらの師と僕を含めた、6人のチーム医療なんです。

阿木 でも、どの師のどの言葉を誰に差し上げるかは、先生がチョイスなさるんですよ。

樋野 そのとき思いついた言葉をポンと言うんです。すると、あー、この言葉は心に響いたなって、顔を見ればわかります。人って、最

〔注2〕 かつての5000円札の肖像として知られ、日本の精神文化を流暢な英語で紹介した「武士道」の著者としても有名。1920年には国際連盟の事務局長を務めるなど、国際人として世界平和に尽力。一方で、女性の教育にも力を注ぎ、新渡戸文化学園の前身である「女子経済専門学校」の初代校長にもなった。

がんにも顔つきがあるんですか？
いじわるそうだなとか、強欲そうだなとか(笑)。



初は本当のことを言いません。でも、対話をしているうちに本音を話してくれます。

阿木 で、そこから「がん哲学外来」の本来のワークになる。

樋野 これまで3000人くらいの人に会いましたが、本音を引き出した後は五つくらい「言葉の処方箋」を出してみるんです。そうすると、どれかが当てはまります。**阿木** でも、南原繁さんにしろ、新渡戸稲造さんにしろ、いまの私たちはほとんど知らないと思うんです。やはり先生のお人柄というか、穏やかな表情や優しい語り口が、聞く人の心に染み通っていくのではないのでしょうか。

樋野 僕は暇だからね(笑)。暇って、お日さまの日に間違って書き換えることができますよね。つまり、太陽の光が差し込む時間のことで。臨床医は忙しいから、光を反射してしまい、日間がないんです。僕は病理をやっていたから、日間があった。だから、が

ん患者に寄り添い、心を開かせるがん哲学外来ができたんだと思うんです。

阿木 病理医って、臨床医と違って学究的なイメージがありますか。

樋野 患者から採取した細胞や組織の診断をしたり、亡くなった患者さんの病理解剖を行うんです。病理医時代は、生きた人間を診たことがありませんでした(笑)。**阿木** 生身の人間と接しない医学

から、突如がんで悩んでいる患者さんの相手をなさるなんて、180度の転換ですね。

樋野 病理の場合は、がん細胞を目で見て、手で触れて、顕微鏡で見て、どういうタイプのがんなのかを瞬時に判断していくんです。そんな仕事に長く携わっていたので、逆にがん患者さんの心の問題にかかわりたいという思いが強くなったのかもしれないね。

阿木 顕微鏡で見るがん細胞って、

どんな形をしているんですか。

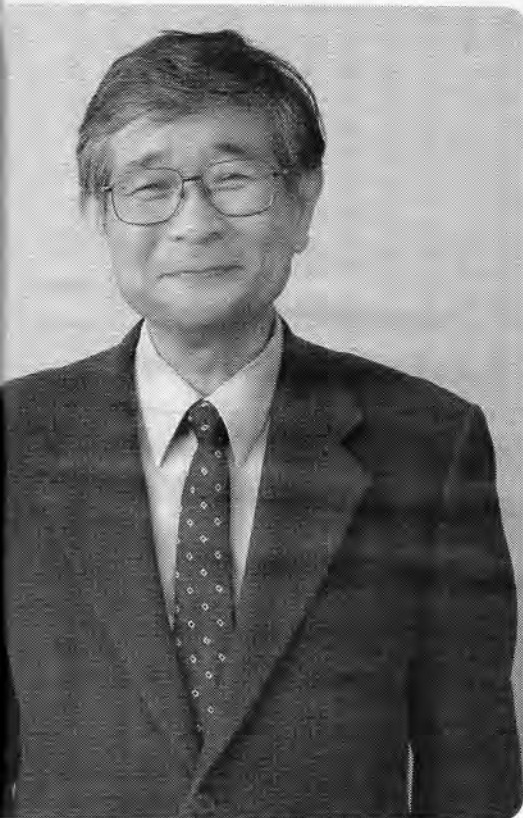
樋野 たとえば、大腸、胃、肺でできたもの、それぞれ違います。正常細胞の形を残しつつ、変化していくんです。

阿木 イメージとしては金平糖のように、イガイガした感じ？

樋野 近いです(笑)。そうやって変化してがん細胞になったものを、表面の風貌というか、顔つきで診断するんです。

阿木 がんにも顔つきがあるんですか？ いじわるそうだなとか、強欲そうだなとか(笑)。

樋野 ありますよ(笑)。がん細胞で起きることは人間社会にも起きるんです。一つの細胞が地球の大きさだとすると、染色体は国のサイズになり、遺伝子は都市レベルで、塩基は一人の人間のスケールになり、その塩基で細胞ががん化してしまふ。言い換えれば、一人の人間が地球をがん化させるということ。だから、社会をよくしようと思ったら、がんを学ばないと。



ANAインターコンチネンタルホテル東京(東京・赤坂)にて

(注3) 1861年、江戸・小石川生まれ。東京外国語学校、札幌農学校を経て、農商務省農務局水産課に勤務するが、84年に退職し、米国に私費留学。以後、キリスト教思想家、文学者として活動。日本独自の「無教会主義」を唱えたことで知られる。著書に『キリスト教問答』(講談社学術文庫)など多数。

阿木 イスラム国なんて、まさに地球のがんですよね。恐ろしい形相をして周囲を取り込み、世界を破壊しようとしている。なるほど、がんを単に病気というふうに捉えるのではなく、私たちに貴重な何かをメッセージしてくれていると思えば、そこからたくさんの方が学べそうですね。

樋野 人間の組織・臓器は、200種類あるんですが、これは世界の国の数と同じなんです。僕は、日本は肝臓のような国になってほしいと願っているんです。

阿木 肝臓は「沈黙の臓器」と呼ばれています。

樋野 正常なときは静かな臓器ですが、再生能力が高く、異物に対しても寛容で、解毒代謝作用もある。つまり、「日本肝臓論」。そんな国になったら、世界から尊敬されます（笑）。

阿木 とても面白い視点ですね。ところで、先ほど先生は臨床医が忙しすぎるとおっしゃいましたが、



確かに多忙で、患者とのコミュニケーションもままならないようです。

樋野 いまは「医療の幕末」なんです。医療従事者は、患者のことを馬鹿から見て、同じ目線では見ていない。「医療維新」、いまだ来たらずということでしょうか。医療維新とは、患者が必要としてくることすべてに、応えることです。

阿木 そういうお医者さんがいてくれたら、どれほど心強いかな。

樋野 いまの医療が幕末としても、不幸なことに勝海舟のような人が出てきていない。

阿木 明治維新は、外圧によって無理やり鎖国をこじ開けられた感がありますよね。日本の医療界は自ら足りない部分に気付き、体制を変えていく可能性ってあるんでしょうか。

樋野 そうしないとイケませんよね。でも、がんの告知一つ取っても、アメリカより20年遅れています。

す。日本でも本人に告知はするようになりましたが、まだぐらつきがある。本当の告知は、医者が知り得た情報と、患者に伝える情報が100%同じものを告知と言います。しかし、以前は病状を軽めに告知しましたが、いまは反対に重めに伝えることがあるようです。

阿木 患者さんのショックを思えば、なぜ重めに？

樋野 訴訟リスクを考えてのことです。医師の保身ですよね。

阿木 患者さんにとって、お医者さんの言葉は絶対なので、告知通り亡くなる方が結構いるのでは？

それって、あんまりですよ。

樋野 医者は、対話というものを学習してきてないんです。医学部のカリキュラムにありませんから。

阿木 でも、言葉ってとても重要ですよ。実は、私の妹は胃がんで亡くなったんですけど、末期にホスピスに入ったんです。ある日、担当医が往診に来て、「ああ、また悪くなっているね」とって平気で口

ありますよ(笑)。がん細胞を表面の風貌というか、顔つきで診断するんです。



(注4) 経済学者。1917年東京帝国大学法科大学政治学科卒業後、住友総本店入社。20年、東京帝国大学経済学部助教授。欧米留学後、23年教授となり植民政策を講じた。37年『中央公論』に発表した論文「国家の理想」が反軍・反戦思想として問題となり、大学を辞職。45年11月、大学に復帰。51〜57年、2期にわたって東京大学総長。

にして……。それを聞いて私、その医者を追いかけて、「そんな言い方をなさらないでください」と抗議したんです。でも、彼はきよんとんととして、何を言われているのかわからない感じでした。

樋野 自分が無神経な発言をしたという自覚がないからです。

阿木 日々、がん患者を診ていると、麻痺してしまうんでしょうか。

樋野 要するに、対話を知らない。患者との接し方、寄り添うということを知らないんです。医師は、正論より「配慮」が必要なんですけどね。

阿木 まさに、いまは配慮に欠けた時代ですね。

樋野 医者使の使命は、最先端の技術で治療することはもちろんですが、人間的責任をもつて手を差し伸べるということも大事なはずですよ。

阿木 そうですよ、一番大切なことですね。それなのに、医学部の教育の中に組み込まれていないなんて。

樋野 本当に残念なことですよ。
阿木 もう一点、医学部で思うこ

とは、医師には適性というものがあつたのではないかと。ただ単に成績がいいだけでは、なつてはいけな職業のように感じます。

樋野 それも教育の問題が大きいと思います。いまは、わかりやすいものばかりが求められる時代でしょう？ 誰もが「いいね！」を求める、フェイスブック症候



群です。

阿木 いまどきの風潮ですね。
樋野 でも昔の偉い人は、皆がわかる話はしなかつた。たとえば、

新渡戸稲造の講義は、半分の生徒がワケがわからなかつた。

阿木 容易く答えが出るような教え方はしないんですね。

樋野 ほとんど脱線ばかり(笑)。

阿木 でも、真理はきちんと聴く人の心に残っていく。

樋野 勉強なんて、そんなものです(笑)。ほとんど忘れてしまつてその後に残るもの。それが大切なんです。

阿木 先生のご著書は、聖書からの引用も多いのですが、キリスト教への造詣が深くていらつしやるようですよ。

樋野 実は僕、さりげなくクリスチャンです(笑)。

阿木 私もミッションスクール育ちなので、「神はその人に耐えられない試練をお与えにならない」という言葉が座右の銘で、事あるごとに心に思い浮かべています。

樋野 僕の場合は、患者さんにはキリストのキの字も言いません(笑)。言葉の処方箋といつても、僕は空っぽの容器を用意するだけで、来た人が自分で水を入れていくんです。

阿木 それががん哲学外来の神髄なんです。現在、全国に80カ所以上の特長があるとか。暇とかおっしゃりつつ、実は超ご多忙なのでは？(笑)

口モ HP <http://www.ganetsugaku.org/>

樋野 いやいや(笑)。僕は開所式に行くくらいで。あとは賛同してくれている医者だったり、患者や市民の皆さんがいろいろなやり方で運営してくれています。でも、

こういったがん哲学外来が、人口1万5000人に対して1カ所は必要だと思っています。つまり、全国に7000カ所必要ってことですね。

阿木 それって、かなりの数ですよ。

樋野 そうでもありません。スターバックスは国内に約2000店。教会はプロテスタント、カトリック合わせて7000カ所。お寺は真言宗や浄土宗がそれぞれ1万もあるんです。

阿木 そういったところが場所を提供してくれば、あつという間に広がりますね。

樋野 そのためには医療界だけでなく、さまざまな分野の方が関心を持ってくれないとね。

阿木 穏やかで暇げな風貌の先生ですが(笑)、内に秘めた情熱は半端ではないとお見受けしました。私のがんになつたら、絶対、そちらに伺います(笑)。

構成・山田厚俊／撮影・根岸基弘